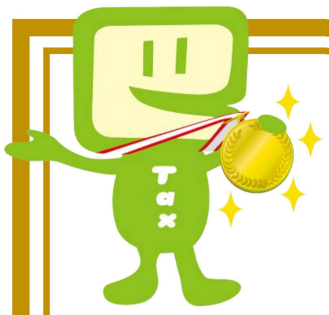


大阪国税局長賞

だから私は、今日も社会を推す

兵庫県立八鹿高等学校　１年　田水　心麗

「推し活」という言葉が定着して久しい。自分の好きなアイドルやキャラクターを応援するために、グッズを買い、ライブに行き、時には投げ銭をする。お金を払うことでその対象の活動を支え、同時に自分も幸せになる。高校生の私にとって、これはとても納得のいくお金の使い方だ。しかしある日、コンビニのレジで消費税を払ったとき、ふと考えた。私たちが文句を言いながら払っている税金も見方を変えれば、日本という社会を維持するための「究極の推し活」なのではないだろうか。

税金を「取られるもの」と捉えるとお小遣いやバイト代が減るだけの嫌な存在に思える。しかし、「ファンクラブの会費」だと考えてみると、急に景色が変わる。私たちが安全に暮らせる警察や消防のサービス、毎日通う学校の設備、そして塾帰りの暗い夜道を照らす街灯。これらはすべて、私たちが納めた税金という名の会費によって運営されている「ファンへの特典」のようなものだ。

ただ、一般的な推し活と税金には、決定的な違いがある。それは、税金が「義務」であり、誰もが参加しなければならないという点だ。もしこれが完全な自由意志の推し活だったらどうなるだろう。派手な最新テクノロジーや大都市のインフラには莫大な資金、つまり投げ銭が集まるが、過疎地の水道管の修理や、生活に困っている人への医療サポートといった地味な分野は誰からも「推されず」に崩壊してしまう。社会というグループは、すべてのメンバーが健康で安全に活動できて初めて、全体として成立する。

つまり税金とは、単なる個人の好みの推し活ではない。国民全員が少しずつお金を出し合うことで、誰一人、どの現場も見捨てないようにする「社会全体の生存戦略」なのだ。誰もが安心して生きられる土台をキープするために、私たちはあえて義務という形をとっている。

私はまだ働いていないけれど、コンビニで買い物をするたびに消費税という名の投げ銭を社会に送っている。自分の払う小さな10円が、私の知らない場所で、誰かの生活を支える大切な資金になっている。そう考えると、税金を払うことが少し誇らしく思えてくる。私はこれからも、この社会という名の巨大なグループを支えるサポーターとして、自分の意志を乗せて税金を納め、この国を推し続けていきたい。